

# masquerade part nine

## number 5

限定100部の内の12/100

edited by dr masato mugitani

## マリーニの「氷の出現」

麦谷真里

(はじめに)マリーニというのは言うまでもなく Max Malini のことです。出自や人物などについては、すでにあちこちに書かれていますので、ここで屋上屋を重ねることはしません。彼の手品を演じる場が、バーやレストラン及び宮廷や名士・富裕層のサロンが多かったので、一般大衆の目に触れることがない分、伝説化しています。とりわけ、客の帽子の下から、大きな氷の塊を出す手品は有名で、ダイ・パーノンが、ホテルのパーティーで、マリーニが入って来たときから一度も眼を離さなかったにもかかわらず、大きな氷を出現させたことに愕いたエピソードを“MALINI AND HIS MAGIC”(写真134)に書いてからは、いわば「伝説の手品」になりました。

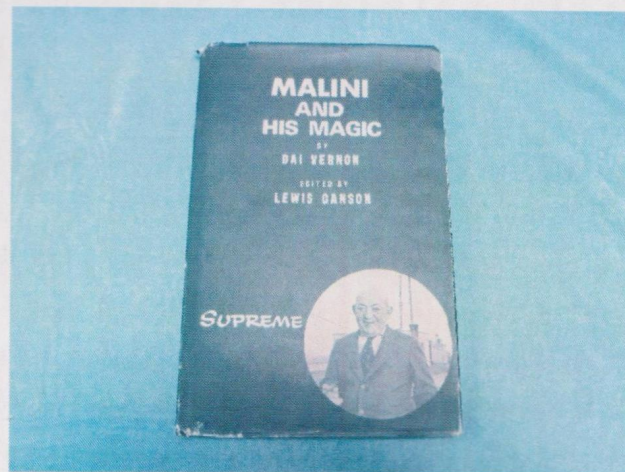


写真134

英国の職業奇術師ポール・ダニエルは、マリーニの手品ばかりを演じるショーを2004年にロンドンで開催しました。その演目のほとんどは、この“MALINI AND HIS MAGIC”で解説されているものです。その努力には敬意を払いますし、基本的には素晴らしいショーでしたが、たとえば、ブ



ラインドフォールド・カード・スタビングは、ボブ・シートのほうがずっと上手ですし、伝説の氷の出現は、一番最後に演じたものの、私の推測が間違っていなければ、氷塊は、テーブルの下に予め準備してあって、それを左手で掴んできて、テーブルの縁で右手に持っている帽子にカップ・アンド・ボールのローディングのようにロードされたもので、マリーニが実際にやっていたものとは異なります。有名な手品を演じると、こんなふうと比較されますので、そういう観点からも、ポール・ダニエルはなかなか勇気のある職業奇術師です。もうひとつ、ポール・ダニエルが、このロンドンのショーで面白いことを言っていました。ハリー・フーディーニが有名なのは、彼の死後20年間に亘り、夫人がフーディーニの名前を広めることに努力したからで、マリーニ夫人は一切、そのようなことをしていないから、一部のマニアにしか名前を知られてないという説明でした。これは、一面ではもちろんそうですが、フーディーニは生前 SAM の会長も務めていますし、奇術雑誌も出していますから、ももとの知名度が圧倒的だったのが大きいと思います。

さて、マリーニの「氷の出現」は、マリーニ自身が解説していない以上、真相は闇の中です。しかしながら、ダイ・バーノンは、“MALINI AND HIS MAGIC”の中で、自分の考えを述べています。その要点は以下の通りです。

- ①観客から借りた帽子の下で、コインの表裏を当てるゲームを行なう。
- ②何回かそれを試みた後、帽子の下から大きな氷の塊を出現させる。
- ③氷は、マリーニの上着の左下に吊り下げられていて、そこからロードされる。
- ④氷のロードの仕方は、基本的に、帽子の下からビールの入ったグラスを出現させる方法と同じである。
- ⑤氷を出現させるタイミングが来るまで、マリーニは30分でも1時間でも氷を上着の下に吊り下げている。

その具体的方法については、後で詳細に考察することになります。

さて、この本は1962年に刊行されたものですので、その時点でマリーニの死後ほぼ20年経っているわけで、その間に多くのマジシャンがこの手品を試みています。それらをすべて網羅することはできませんが、主要なものをいくつか述べたあと、実際のやり方を考察します。

## 1. Eric de la Mare

Peter Warlock の“PENTAGRAM”Vol.9 NO.12(1955年9月)に Eric de la Mare が、自分のやり方も含めて、かなり具体的に、マリーニのこの種の手品についておよそ5ページにわたって言及・解説しています。それに触れる前に、Eric de la Mare という人について説明しておかなければなりません。Eric de la Mare(1901-1957)は、Max Malini(1873-1942)よりはかなり若い職業奇術師ですが、57年の生涯のうち24年をセイロン(いまのスリランカ)で過ごし、そこでマリーニと出会いました。ロンドンにいたときは、まだアマチュアで、ロイ・ウォルトンやアレックス・エルムズレイたちと手品の会合を持っていました。1955年にはマジック・サークルの会長にも就任しています。当時のセイロンは大英帝国の植民地として栄え、紅茶や宝石の産地でしたから、当然、富裕層も大勢いて、そういうサロンに招かれて手品を見せる機会は多くあったのです。たと



えば、Eric de la Mare は、1923年—1932年の間、9年間もセイロンにあるヒル・ステーション・ホテルを住まいとしていたのです。このホテルはいわばセイロンのリゾート地にあるホテルで、英国人を始めアジアの富裕層たちが滞在していたものです。

こんなふうにも書いても現代の日本人にはわからないかもしれませんが、たとえば、英国人は、アフリカで気候の暑いケニアの首都を、標高が高くて、比較的涼しいナイロビ(標高1795m)に定めて過ごしやすくしたり、アフリカ南部のジンバブエでも、首都ハラレの標高は1490mで夏でも平均気温は20度前後と過ごしやすい高原を選んだりしているのです。植民地経営は徹底していて、ジンバブエのジャングルの中に忽然と現れるヴィクトリア・フォール・ホテルは、その名の通り、景勝地ヴィクトリア・フォールに近く、テラスに座ると遠くにザンビアを望む、まさに英国人のために建てられた植民地のホテルです。いまはもう植民地ではありませんが、ホテルは存在していて、早朝、夜明け前にジープで出発して、河に水を飲みに来る動物たちを観るサファリが行なわれます。動物を観た後は、ドライ・サバンナで、随行してきたホテルの従業員たちが、テントを張って、シャンパン付きの朝食を準備してくれます。植民地時代の夜は、ホテルやサロンでパーティーが繰り広げられますから、植民地では、職業奇術師の出番はいくらでもあったのです。

Eric de la Mare は、そのようなホテルの食堂やサロンやバーで職業奇術師として働いていました。マリーニの評判は客から聞いていましたし、その演ずるものも客のエピソードから聞いて知っていました。そして、実際に、マリーニ自身がセイロンに来て演じる姿も見たと思われれます。その中でも彼が興味を持ったのが、客の帽子の下からの煉瓦(レンガ)の出現です。“PENTAGRAM”には、Eric de la Mare のやり方が詳しく解説されています。この解説のタイトルが、“MAX MALINI”ですから、明らかにマリーニの煉瓦の出現に触発されたものです(写真135)。



写真135

彼の手順は、やや複雑で、客から借りた帽子の下で、コインの表裏を当てるゲームを行なうまでは同じですが、まず、ミルクの入ったグラスを出し、次いで煉瓦を出します。しかも、煉瓦を1個出した後、もう1個出すのです。ミルク、煉瓦、煉瓦、という出現で観客は驚きますが、鳩と同じで数多く出せばいいというものではありません。解説は、ホルダーのサイズや構造など詳しく書かれていて、この手品をやってみたいと思う人には重宝です。煉瓦は、そのままの大きさでは、長さが約23cm



と長くて帽子に入らない可能性があるので、約18cmと短くすることまで書いてあります。ミルクの入ったグラスと2つの煉瓦は、ベルトに付けたホルダーで腰の左側と後側に配置し、上着で隠します。観客の一人をステージに上げて、マジシャンの左側でやや前に立たせ、ホルダーからグラスや煉瓦を取るときも盾に使います。よくできている手順だとは思いますが、解説してあるのは煉瓦だけです。後年、同じように氷も出したということですが、氷のことはまったく書いてありません。

## 2. ビール・グラスの出現

バーノンは、前述のように、「帽子の下からの氷の出現は、基本的には帽子の下からのビール・グラスの出現と同じだ」と、“MALINI AND HIS MAGIC”の中で述べています。そして、そのビール・グラスの出現については、絵も交えて詳しく説明しています。マリーニは、これをバーで演じています。そこで、まず、どのようにしてビールの入ったグラスを用意するかが述べられていますが、冗長になりますので、その部分は割愛して、ビールの入ったグラスを上着の下に用意しているところから始めます。グラスは、左腕で上着の上から押さえています。マリーニはこの状態で、「その時」が来るまで、30分でも1時間でも待ちます。マリーニは、決して、自分から手品を見せようとは言わないのです。自分が注目の中心になるまでじっと待ちます。そして、誰かが、「もうひとつ何か見せてくれませんか？」と言ったときも、できるだけ言葉を濁して先に延ばします。そして、ちょうどいいタイミングが来たと思ったら、「じゃあ、最後にもうひとつだけ手品を見せましょう」と言って、帽子と一枚のハーフ・ダラーとを借ります。そして、テーブルに置いたコインの上に帽子を被せ、表か裏か(ヘッド・オア・テイル)を観客に訊ねます。答えがどちらであっても、マリーニはその場に合った応答をします。この表裏ゲームの3回目のときに、ビールのグラスを帽子の下にロードします。これは、そんなに難しいことではありません。2回目のゲームのときにテーブル上のコインをカバーするために左手で帽子を持ち上げたとき、右手は、上着の下にあるビールのグラスを掴んで、両膝の間に挟みます(写真136:上着は除いてある)。



写真136

2回目のゲームの結果を見るために、右手で帽子を上げたとき、今度は左手でビールのグラスをテーブルの縁で帽子の中に入れます。ただちに、右手で、帽子の上からグラスの上を掴んでち



よっと持ち上げます。このまま、テーブルの上のコインに帽子を被せますが、グラスも音を立てないように慎重にゆっくりとテーブルの上置きます。

次に、3回目で帽子を持ち上げたときには、ビール入りのグラスがあるので、観客は誰もびっくりするのです。

### 3. Steve Cohen

氷の塊は帽子の中から出て来るので、それ相応の大きさがあります。最大の課題は、大きさもさることながら、氷は溶けますから、出現させるまでの間、溶けた水を滴り落ちさせることもなく、長時間に亘って、どこかに持っていなければならないことです。マリーニは、バーやレストランに立って歩いて入って来て、さまざまな手品を見せたあと、最後に客の帽子の下から氷の塊を出します。その間、ウェイターやウェイトレスなどの従業員が、ひそかに氷の塊をマリーニに運び渡した形跡はありません。このことは、目撃者であったダイ・バーノンが証言しています。バーノンは、アイス・トングで氷をどこかに吊るしていたのだと言っています。マリーニが活躍していた時代には軽い小さなトングがいろいろあった、とまで書いています。言い換えると、バーノンの本が書かれた1962年には、もう、そのようなトングは販売されていないということだと思われる。

この結果から類推すると、氷は、マリーニの身体のどこかに最初から隠し持たれていたことになります。実際、バーノンもそのように書いています。

幸いなことに、つい先日、“MAX MALINI: KING of MAGICIANS/MAGICIAN of KINGS”と題する大部な本が出版されました(写真137)。著者は Steve Cohen です。

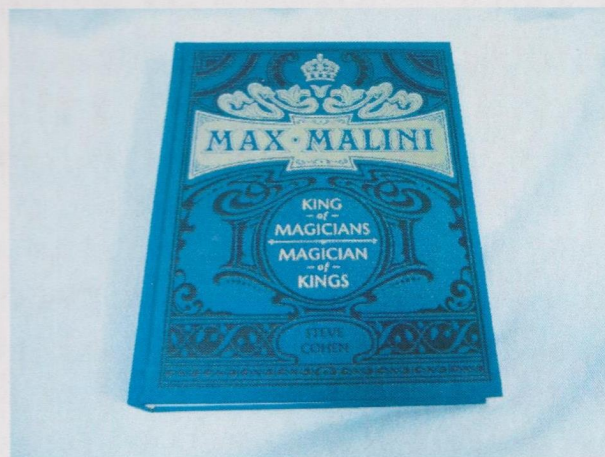


写真137

Steve Cohen は、自分も、高級ホテルなどで富裕層相手に手品を演じているので、その観点から言えば、マリーニと通じるものがあります。ちなみに彼は、留学生交換プログラムで早稲田大学に学んでいて、計5年間日本にいましたから日本語に堪能です。

この本は、520ページにも亘る大部な本ですが、基本的に、Steve Cohen の演じるマリーニの手品を解説したものです。もちろん、歴史的なエピソードも含めて周辺の情報がたくさん散りばめられているので、読むのに退屈することはありません。「氷の出現」についても、彼なりの拘りがあ



って、たとえば、透明な氷を作るには、どのような水を使ってどのように凍らせたらいかなどをこと細かに書いています。私自身は氷の質にはまったく拘りがないので、水道水を普通に凍らせたものでよい、と思っています。

前述のように、マリーニが小さなアイス・トングを使って氷を上着の下に吊るしていたらしい、とバーノンが述べています。しかしながら、その「小さなアイス・トング」がどのような形状でどれくらいの大きさであったのか、どこにも記載がないので、イメージが湧かなかったのですが、スティーブ・コーエンの本に彼が骨董屋で見つけた当時のアイス・トングの写真が掲載してありました。そのおかげで、初めて理解ができました。アメリカで、氷で冷やす冷蔵庫の概念ができたのは1803年で、refrigerator という英単語が登場したのもそのときです。家庭用の電気冷蔵庫ができるのは1918年ですから、マリーニが45歳になるまで世の中の冷蔵庫はすべて氷で冷やしていて、氷は専門業者によって大きな塊で各家庭に配達されていたのです。したがって、各家庭では、氷を小さくして、それを運ぶ小さめのアイス・トングが必要だったわけです。言い換えると、1918年以降、この小さなアイス・トングの需要はなくなったと言っても過言ではありません。バーノンがマリーニの本を書いた1962年には、この種のトングは市場から消えていたものと思われる。

Steve Cohen のやり方は、非常に参考になりますが、忘れてはいけない大事なことがあります。彼は、ニューヨークのウォールドルフ・アストリアという最高級ホテルの35階のフロアで限定的な人数の観客を相手に手品を演じています。したがって、あくまでもその環境で演技を行なうのが大前提で、誰にでも適応できるものではありません。

マリーニは、帽子の下からさまざまなものを出したと言われていますが、氷の塊以外で有名なものは、前述の Eric de la Mare のところで紹介した「煉瓦」です。マリーニのやり方は、Eric de la Mare のやり方とはまったく異なりますが、煉瓦の出し方と氷の塊の出し方とは基本的に同じです。同じであるにもかかわらず、Steve Cohen は、これまでに煉瓦の出現を1万回行ない、氷の塊の出現を20回行なった、と書いています。この差を見ても、いかに氷の塊のほうが難しいかがわかれると思います。

Steve Cohen の「氷の出現」は、まさに彼の「煉瓦の出現」とやり方はまったく同じで素材が異なるだけです。言い換えると、氷をアイス・トングで上着の下には吊っていないということで、そういう意味でも、マリーニのやり方とは異なりますし、まさに、ウォールドルフ・アストリアのいつもの部屋で準備できるから可能であって、環境が大いに関係します。

それでも、Steve Cohen の「氷の出現」は非常に素晴らしい助言をいくつか与えてくれています。そのひとつめは、立って演じるのは危険であること。ふたつめは、帽子の上から氷を掴んでいるのは難しいので、むしろ、帽子を傾けて氷の重さで氷を帽子内に維持すること。そして、みつめは、氷をしっかり掴んでスムーズに演技をするために、氷に指を入れる穴を開けておくこと、などです。

#### 4. masquerade タイプのマリーニの「氷の出現」

マリーニの時代のアイス・トングの入手は、骨董品屋等で偶然に見つけない限り困難です。しかし、現代では、保冷材や吸水材など、マリーニの時代にはなかった素材も多くあります。そこで、い



ま入手できるもので考察したいと思います。

まず、手順はともかく、この手品を実現するために必要な要素を列挙してみます。

- (1) 氷の塊を一定時間(30分~1時間)マジシャンの身体のどこかに隠しておくこと。
- (2) 氷は必要なときにただちにマジシャンの手に入って来なければならないこと。この意味でも、アイス・トングは、氷をしっかりと捉えて離さず、下から押せば簡単にトングから外れて手の上にとれるのでこの手品には優れものの道具である。
- (3) 氷ができるだけ溶けないようにする仕組み。
- (4) 氷が溶けても、水が滴り落ちないようにする仕組み。
- (5) 氷の冷たさをマジシャンが感じないようにする仕組み。
- (6) 帽子の準備。最近では山高帽やソフト帽を被っている人が少ないので、場合によってはマジシャンが準備しておく必要がある。
- (7) 帽子から出現させる氷。ちょうどいい大きさの氷など売っていないので自分で作るしかない。

## 5. アイス・トング

アイス・トングと言うと、アイスペールからウイスキー用の氷を挟んでグラスに入れるピンセット様のものを思い浮かべるかもしれませんが、ここで述べるのはそれではなく、魚市場などで大きな氷を挟んで移動させている鉗のようなアイス・トングのことです(写真138: デックは比較のため)。



写真138

アイス・トングは、一度でも使ったことのある人はわかると思いますが、氷をしっかりと挟むとトングの歯が氷に食い込んでそのまま持ち上げることができます。しかし、氷を運びたい地点に置くと、氷が下からトングを押し上げる機構になっていて、トングは容易に解除されます。言い換えると、トングで固定して上着の下に吊るしておいた氷の塊は、下から手で氷を上方に押し上げてやると、苦もなくトングの固定は解除されるということです。重量のある氷の塊を上着の下に一定時間隠しておいて、かつ必要なときには簡単に取り出せる器具は、もともとそういう目的に作られたアイス・トングが最適なのは言うまでもありません。ただ、「一定時間、そのままの状態を保持しておく」、という機能はありませんから、その点では工夫が必要です。そもそも、アイス・トングはかなり大きな



重量のある氷塊を対象にしていますから、素材も鉄のものが多く、かつ、なかなかのヘビー・デューティーなのです。

探してみると、いろいろなものがあつたので紹介してみます。どれがいいかは、それぞれ、重さやハンドル(持ち手)の大きさなど、使い勝手がちがいますし、これを最初に演じるのであれば、少し無理もできますが、最後に演じるのであれば、やはり、軽いものもいい、などといろんな条件がありますので一概には言えません。自分の演技スタイルに合わせて実際に練習してみてもいいかもしれません。それでは、カテゴリーごとに述べます。

#### (1) 日本での市販アイス・トング。

これは、いわば本物のアイス・トングです(前掲: 写真138)。大きな氷を運ぶため、重量が1.6kgあります。しかも、全体の長さは40cm近くあり、持ち手の部分の大きさも8cm×10cmで、これが広がりますから、この部分を含めて上着の中に吊るすというのはマジシャンにとってかなりの負担になります。帽子から出す氷は小さめのもので700gはありますから、合計2.3kgになりますので、誰にでも扱える代物ではありません。

#### (2) アンティーク(骨董品)

Steve Cohenのように、骨董品屋で探してみました。日本製のものは見つかりませんでした、欧米のもの2つありました(写真139)。



写真139

このうち、左側のアイス・トングは、長さは32cmと長いですが、ご覧のように持ち手の部分が小さく、かつ重量が700gと軽いです。氷を吊り下げても1.4kgならなんとかなりそうです。右側のアイス・トングはアルミ製ですので、軽いだらうと喜んだのですが、600gと期待したほど軽くありませんでした。ただし、これも持ち手の部分は小さく、かつ氷を掴んだ固定の感覚がなかなか優れています。

#### (3) 日本製のトング(アイス・トングではないけれど)

それでも、やはり、日本の現在の市場で入手できるものはないかと探したところ、アイス・トングではありませんが、材木などを運ぶためのトングが見つかりました(写真140)。





写真140

いずれも全長は30cmくらいと小さくて、ご覧の通り持ち手も扁平や棒状で相対的に小さいです。重量はいずれも500gです。ただし、これらは木材用ですから、氷をちゃんと保持するためには先端を鋸で鋭くするなどのアレンジが必要です。

#### 6. 保冷バッグ

マリーニの時代には、こんなものはなかったので、氷が溶ければ上着やシャツを濡らしたものと思われます。いまは、保冷バッグがありますから、それを使えば、保冷もできるし、上着やシャツが濡れることも防げます(写真141)。



写真141

使い方は、ちょっと加工が必要です。左の保冷バッグはファスナーが付いている口の方を下にして使います。底にできるだけ小さな穴を開けそこにアイス・トングを通し、氷が保冷バッグの中にちょうど収まり入るようにします。このことから、あまり大きなアイス・トングでは、保冷バッグの中に収まりきらないことがわかると思います。この保冷バッグの中(壁)には、次に紹介する吸水クロスを両面テープなどで装着して、溶けてくる水を吸収させます。実際に、どれくらいの時間で、どれくらいの水が吸着されるかを吸水クロスの項で実験してあります。



## 7. 吸水クロス

これもマリーニの時代にはなかったものです。氷は、溶けると水が滴り落ちますから、上着やシャツに染み込んだり、場合によっては床に落ちたりします。それを防ぐために、氷から溶ける水を、この吸水クロスで吸い取ります(写真142)。



写真142

実際の使い方は、この吸水クロスを保冷バッグの内側に両面テープで貼りつけておきます。その状態で保冷バッグのファスナーをある程度開けて時間経過で溶けてくる水の量を実験してみました。

結果は、次の通りでした(室温22°C)。

経過時間	15分	30分	1時間
保冷バッグもクロスもなし	0cc	5cc	71cc
保冷バッグのみ	0cc	0cc	31cc
保冷バッグ+吸水クロス	0cc	0cc	2cc

これは氷を作る水の成分(硬水とか軟水とか水道水とか)にもよると思いますが、そこまでは拘らずに考えます。したがって、この結果から考えると、15分では殆ど溶けず、1時間でも「保冷バッグ+吸水クロス」なら圧倒的に溶けてくる水分を防げるということがわかりました。

## 8. 帽子

マリーニがどんな帽子を選んでいたら正確にはわかりませんが、シルクハットはこの手品には向いていません。形状だけでなく、操作性に問題があります。おそらくいわゆる山高帽もしくはソフト帽を使っていたと思われます。この時代のレストランやバーであれば、帽子を被っていた人は大勢いたでしょうから、選択は比較的容易だったと思われます。しかし、現代では、特に日本では、柔らかい山高帽を被っている人を観客の中から見つけるのはかなり難しいです。ポール・ダニエルは一度観客から提供された帽子を、これはダメだ、と言って一旦返して、自分が用意した帽子を取りに行こうとしますが、観客の中から別の帽子が提供されて、それを使っていました。それは婦人用の帽子でしたが、別に男性用女性用は問いません。ただし、高級な山高帽ではいわゆるクラ



ウンの部分(頭に被る部分)が固くて、帽子の上から氷を掴めないので、この手品には向いていないのです(写真143)。



写真143

写真143の左側の帽子は高級品で大きさなどは手ごろなのですが、固くて、外から氷を掴むことができません。一方、右側の帽子は、いわゆるソフト帽ですが、クラウン部分は柔らかくて、帽子の外から氷を掴むことができます。演技のときは、とりあえずは、マジシャンが自分で用意しておくほうが無難です。大きさは、氷の塊を出すことを考えて、高さも12cm程度は必要ですし、被る部分の径も15cm×19cm程度は必要です。あまり大きな帽子はたった1枚のコインの表裏の判別のためには大仰ですし、あまり小さな帽子では大きな氷塊を出すことができません。自分で被る必要はありませんので、扱いやすい大きさの帽子にします。

#### 9. 氷

街の氷屋さんに行けば、大きな氷も売っていますし、カットもしてくれますが、なかなか手品向きの大きさにはできませんので、自分で作ります。大きな氷のカットは意外に難しいので、自分が出現させたい氷の大きさに最も近いか、やや大きいタッパウエアを買って来て、それに水道水を入れて冷凍庫で冷やして作ります(写真144)。このとき、タッパウエアの蓋を閉めて冷凍庫に入れてはいけません。氷になるときに体積が増えて、蓋や底が破損します。蓋をしないで、そのまま冷凍庫に入れます。大きければ削ることはできます。水の成分によっては透明度や溶ける速度に影響があると思われませんが、そこまでの実験はしていません。

氷を長く溶けないように持たせるためには、蒸留水か一度煮沸した水を使った方がいいとステイブ・コーエンは書いています。しかし、この2つは同じではないので、よくわかりませんが、少なくとも滅菌したほうがいいことは確かです。ただし、「長く」というのはどれくらいの時間のことなのかわかりません。また、チャーリー・ミラーは、どうせ帽子から出すのなら、いかにも冷凍庫で固めて作りましたという四角な氷よりも、まさに岩のようなロック・アイスがいいと書いています。これは好みの問題で、準備ができれば岩のようなアイスがいいかもしれません。

なお、氷の反対側に指が入るほどの穴を開けて固定しやすくするアイデアですが、演技の後、



しばらくは、この氷を観客の目の触れる場所に晒して置く場合は、やはり穴などないほうがいいのです。そのことも含め、出現した氷の処理はあらかじめ考えておかねばなりません。ボウルやバケツなどを用意しておいて、そこに入れます。



写真144

#### 10. ベルトとトンクの固定

アイス・トンクを吊り下げるためのベルトが必要です。最低でもトンクと氷とで1.5kgの重さがありますから、それに耐えられるベルトにします。サスペンダーで代用するとして、やや幅広のものに、トンクを固定する機構を設置します。トンクをサスペンダーに接着剤などで取れないようにくっつけてしまうと準備のときにたいへんですので、他の用途のコネクター・キットを流用して、トンクをサスペンダーに装着したり外したりできるメカニズムが理想です。私は、アルミ製のトンク以外は、ほとんどが鉄製であることに着目して水平耐荷重量8kgの大きな円盤状の強力ネオジウム磁石を2個ずつサスペンダーの前と後とに装着して計4個で固定し、これにアイス・トンクをくっつけています(写真145)。磁石でくっつけるだけですから準備は容易ですし、方向性に柔軟性がありますから便利です。これも、マリーニの時代には考えられなかったことです。



写真145

トンクの位置関係や高さなど試行錯誤が必要です。大事なのは、実際にトンクに氷を挟んでベ



ルトにセットしてみることで(写真146:保冷バッグは除いてあります)。演技のときは保冷バッグを装着しますので上着やシャツが濡れることは心配しなくていいですが、右手で下から氷を受け取ることになりますから、高さは重要です。また、この上に上着を着たときに、上着の膨らみ具合とか、右手の入れ易さとかも、やってみて実際の位置を決めます。



写真146

#### 11. コイン

日本では500円玉でいいと思います。財務省の解説では、桐の図柄の描かれている面が表で、数字の500が刻印されている面が裏です。コインは、テーブル上で軽く回転させて、帽子を被せてから、観客の1人に表か裏か訊ねます。当たったときや当たっていなかったときの台詞は決まったものではなく、その場の雰囲気マジシャンが適当に言えばいいのです。

以上の準備のたいへんさを考えただけでも、Max Malini がいかに偉大だったかわかると思います。それでは、実際のセットと演技の説明に移ります。

#### [準備]

①アイス・トングで固定した氷を保冷バッグでカバーして、ファスナーを閉め、アイス・トングをサスペンダーの磁石に固定します(写真147)。磁石は上下に動くので、この範囲で高さを調節します。



写真147



②帽子と500円玉はマリーニの場合は観客から借りますが、前述のように、日本ではマジシャンが用意しておいて、観客に改めてもらいますので、帽子と500円玉を用意しておきます。

#### [やり方]

- ①基本的にこの手品はバーのような背の高いテーブルで演じることを想定しています。マジシャンが座っている椅子も背の高いものになります。したがって、もし、クローズ・アップ・ショーのような低いテーブルで演じる場合は、おそらく座って演じることになりまますから、氷のロードはもっと容易になると思われます。スティーブ・コーエンが言っているように、座らないで立ったままで、氷を両膝の間に挟んで演じるのは、氷が滑って落ちる可能性があつて危険です。
- ②マジシャンはテーブルの前の椅子に座っています。マリーニのように、タイミングを30分も1時間も待つ必要はありませんが、仮にクローズ・アップ・ショーの一環として演じているのなら、先に、いくつかの手品をやってみせます。カードでもコインでもかまいません。
- ③いよいよ、「氷の出現」をやるタイミングになったら、観客に500円玉と帽子を貸してくれるように頼みます。頼みながら、右手を上着の中に入れて、保冷バッグのファスナーを開けます。手に水がつくかもしれませんが僅かですから上着の内側でそっと拭いてしまいます。
- ④氷を外から掴めるような帽子を貸してくれる人がいたら、それを借ります。500円玉も借ります。貸してくれた人を忘れないようにします。これは大事なことです。帽子も500円玉も持っている人が見つからなかったら、予め用意しておいた帽子と500円玉を出します。観客の1人に手伝ってくれるように頼み、前に出てもらいます。この客は、マジシャンから見て、右前に座らせます。
- ⑤まず、この客に、帽子と500円玉を調べてもらいます。帽子の中に余分な500円玉が入っていないかなどを調べさせます。満足したら、「これから、一種のゲームを行ないます。500円玉を帽子の下で回転させますので、表か裏か当ててください」と言います。客が理解するのを待って、「500円玉のどちらが表かご存知ですか？」と訊きます。答えがどちらでも、客が表と言ったほうを表に決めてもいいと思います。
- ⑥左手に500円玉、右手に帽子を持って、500円玉をちょっと回転させて、その上に右手の帽子を被せます。右手は一旦、帽子から放します。客に、「表ですか？裏ですか？」と訊ねます。客が何と答えようとも、右手で帽子を上げて、500円玉を見ます。客が当たっていたら、「これはまず試しにやってみたのです。確率的には半々です」と言います。客が当たらなかった、「どうです？確率は半々なのに、なかなか当たらないものでしょう？」と言います。
- ⑦「もう一回やってみましょう」と言って、左手で500円玉を回転させて、右手で帽子を被せます。客の顔を見ながら、左手で帽子を指差し、右手をテーブルの下に降ろし、上着の内側で左のほうに伸ばして、氷を下から持ち上げて、トングをリリースします。氷が右手に落ちますから、しっかり持って、これをただちに膝の上に置きます(写真148:上着は除いてある)。氷をそのまま膝の上に置くのですか？と思われるかもしれません。その通りです。ビールのグラスを出すのと基本的に同じである、とダイ・バーノンが言ったことを思い出してください。それと、前述のビール・グラスの出現の説明も合わせて思い出してください。グラスは一旦膝に挟みました。



⑨氷を帽子の中に入れて、ただちに右手の帽子を客側に斜めに傾けて、氷の重さで、帽子の中に氷が留まるようにします(写真150)。これは、スライヴ・コーエンのアイデアです。実際にやってみると、けっこう氷の収まり具合はいいようです。このあと、ソフト帽子の上から氷を握むようにしますが、まだ強く握む必要はありません。この状態で、帽子をテーブルから浮かしたまま、氷を握んで、ゆっくりと帽子と手首とを手前に回転させます。ただちに、左手で500円玉を回転させて、その上に、右手の帽子(と氷)をゆっくり被せます。右手は放します。このときの動きで、重要なのは、右手の指先の力の入れ方です。氷をその重さで帽子の中に保持しているときは、右手にも指先にも力が入っていませんが、そこから帽子を手前に回転させつつ外側から氷をしっかりと握むと、右手にも指先にも力が入ります。このことが観客にわかったら、何か持っている時間と思われずから、そう思われないうための練習が必要で、帽子を通して氷を持つている時間

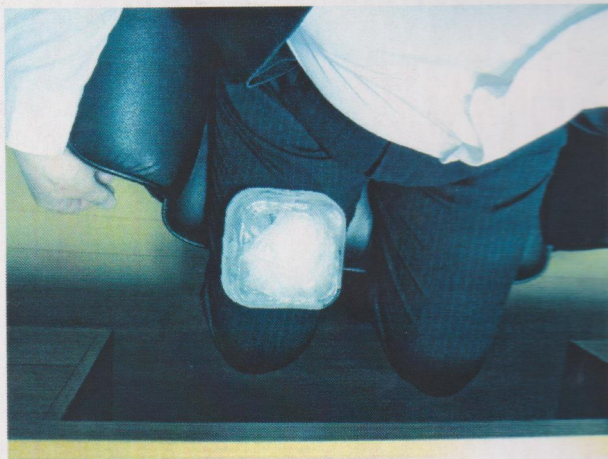
写真149



(写真149:上着は除いてある)。

⑩客に、「表ですか？裏ですか？」と訊ねます。客が答えるのを待って、右手で帽子を持ち上げ、テーブルの縁まで持って来ます。客が当たれば、「よく当たりましたね」と言い、当たらなかったら、「なかなか当たらないものでしょう？」と言いつつ、左手で氷を握んで帽子の中に入れて

写真148





は、2秒もありませんので、一瞬です。ゆっくりでかまいません。



写真150

- ⑩客に、「これが最後です。表ですか？裏ですか？」と訊ねます。客が何と答えようとも、「自分で表か裏か確認してください」と言います。客が、帽子を上げると、大きな氷の塊があるのでびっくりします(写真151)。
- ⑪観客に帽子と500円玉を返すのを忘れないでください。



写真151

[コメント]

以上が、マックス・マリーニがレストランやバーで演じていた伝説の「氷の出現」です。これなら、1時間以上は待つことができますが、大事なことは、マジシャンが、その間、一度も部屋から出て行かなかったことが観客に認識されていれば、氷の出現は驚き以外の何ものでもありません。

今回は、「氷の出現」に絞って書いたので、マリーニの家族とか生い立ちとか、使った奇術書とか、あるいは恋や結婚や子どものことなど、それらの周辺のこと是一切省きました。そういうことに興味のある方は、2012年10月号の“GENII”に、David Ben がいままで表に出ていなかった細かいことまで含めて、かなりよく調べて約40ページに亘って書いていますので、一読されると面白いと思います。



# Sense of Touch (1)

麦谷真里

(はじめに)メンタル・マジックは、本も用具もたくさん持っています。しかし、Nate Staniforth の作品を除くと、私が自分で演じることはほとんどありません。理由を訊かれると困るのですが、自分の taste に合わないと感じるしかありません。この場合、“B'Wave”や、“Invisible Deck”などのように、カードやデッキそのものに何らかの仕掛けがあるものは、私の理解では普通の手品の範疇であって、メンタル・マジックには入れないことにします。

ここ数年、触覚に関する奇妙な手品をテレビなどでよく観かけるようになりました。簡単に言うと、二人の観客に離れて立ってもらい、マジシャンが一方の観客の身体の一部に触れると、もう一方の観客はマジシャンが触れていないにもかかわらず、その触覚を感じるというものです。観客ではなくて、人形を使っているマジシャンもありました。その場合は、人形の身体の部分(たとえば肩)をマジシャンが触ると、離れて立っている観客が、肩を触られたと感じるものです。不思議と言うよりも胡散臭い感じがしました。けっこう有名なマジシャンも演じていて、David Blaine もテレビで演じていましたし、Amelie van Tass と Tommy Ten の“The Clairvoyants”は、本来の透視ショーは何回観ても不思議ですが、彼らでさえ、これと似たような演技をしているのを観ましたから、一種の「流行り」なのかもしれません。

実際はどこから見てもメンタル・マジックなのに手品と標榜していない人は、昔も今も洋の東西を問わず、たくさんいて、そういう連中が、この「触覚手品」を演じないのも不思議です。こっちのほうがよほど精神感応的な感じがするのに、技術と手間が必要だからでしょうか。

私は、この分野に造詣は深くありませんが、触られてもいないのに、「触られた」と感じることは科学的にはあり得ませんので、実際は触られているのです。ただ、マジシャンは離れたところに立っていて、マジシャンが触ることは不可能に見えますから、そこに手品の要素があります。さらに心を読んで伝達するような演出を加味すればメンタル・マジックになると思われます。

この場合、客が二人だけで行なう場合と、この二人の客の動作を大勢の観客が観ている場合とがあります。客が二人だけの場合は、目を開けているほうの客は、マジシャンが自分の身体に触れるのを見ているわけですから、驚くのは目を瞑っているほうの客だけということになります。これもいろいろなやりかたがあって面白いのですが、今回は、あくまでも大勢の観客がステージ上の二人の客の動きを観ていて、目を瞑っていた客の反応を見て、自分たちも驚くという構成にしたいと思います。

さて、マジシャンが、離れた観客の身体に触ることは可能でしょうか？

結論から先に言いますと、実際に触ると、触ったと思わせるのは、事象は違いますが、結果は同じですので、その質問の答えは、「はい。可能です」になります。その手段は大きく分けて4つあります。



(1) 時間差で触ること。観ている観客には、マジシャンが触ったときに、同時に観客の一人が触られましたと返事をしたように思えますが、実際には、時間差があつて、マジシャンの訊き方によって、あたかも二人の客が同時に同じタイミングで触られたように答えていること。

(2) ギミックが観客の見えないところに設置されていて、そのギミックからのハンマーなどによって、観客が触られたと勘違いすること。このギミックはマジシャンによって離れたところから操作される。

(3) インビジブル・スレッド等の見えないスレッドが触るもの。

(4) その他

## 1. 沿革

それぞれの項目に「触れる」前に、この現象の沿革を簡単に述べておきます。

最初にこのことを文章に書いたのは、Milbourne Christopher です。残念ながら私はその本を所有していませんし、当然にも読んでいません。次に、触覚をメンタル・マジックに取り入れたのは、Banachek こと Steve Shaw で、Banachek は、そのことを、“Psychokinetic Touches”(1995年) という小冊子で、発表・解説しました(写真152)。

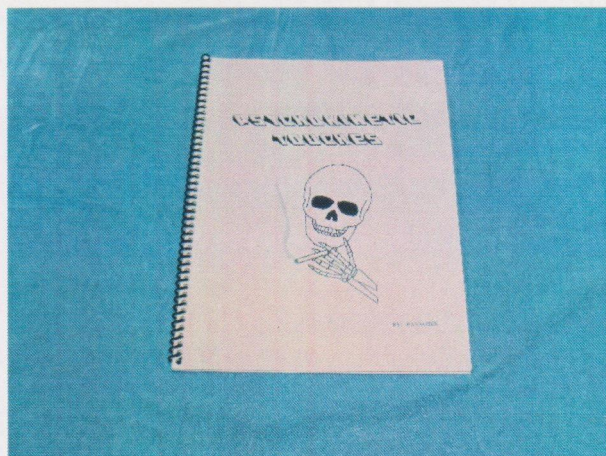


写真152

Banachek 以前にも有名な英国の心霊術師であった Doris Stokes(1920-1987) が似たような演技を演じていたとの記述もあり、彼女は有名だったので映像が残っているとのことですが、私はそれを観たことがありませんし、彼女のことを書いた本にも、そのような技術的なことは書いてないので真相はわかりません。この detail にのめり込むと抜けられなくなるので、このへんで止めます。

Banachek も、最初にこのアイデアを読んだのは Milbourne Christopher の本だと書いています。それにヒントを得て、この小冊子に解説したような方法を考えたということでした。Banachek は、メンタル・マジシャンですから、これを演じるためのストーリーや演じ方を書いたのが、この小冊子です。そして、これが刊行されてから、予想外に奇術界の注目を集め、類似の現象を起こすためにさまざまな方法が考えられ、発表されて来ました。それには、伏線があつて、Banachek は、これより前に“PK Time”という時間をコントロールする小冊子を出していて、それが、多くのメンタル・マ



マジシャンに評判だったので、第2弾についても出版と同時に注目を浴びたのです。

さて、「PK Touch」は、後述の「時間差」の原理を使って、離れた二人の客の、一方だけに触ったのに、もう一方の客がそれを感じる現象を説明したものです。目を瞑っているほうの客に、ストーリーを話しながら、手を身体に翳したときに、実際に肩などに触れる方法が書いてあります。それは、マジシャンが手指をまっすぐに伸ばしたまま、掌を客の身体から離して翳しているように思わせて、実際は動きの中で、たとえば中指だけを曲げて、客の肩に触れるなどの操作です。もちろん、このときは、まだ目の開いている方の客には触っていません。実際に、このあとで、目の開いているほうの客の肩に触り、次いで、目を瞑っているほうの客にする質問は、次項で詳しく取り上げます。

## 2. 時間差を使うもの

二人の観客の間が、かなり離れている場合と、近接している場合とがあります。まず、仮にステージで行なうと仮定して、二人の観客をステージ上に上げます。二人の位置は十分に離れているものとします。二人のうち、一人には目を瞑ってもらい、マジシャンは、もう一人の目を開けているほうの客のそばに立ち、右手で、客の左肩を3回軽く叩きます。この状況は、ステージを観ているすべての観客に明らかになっています。次に、目を瞑ってもらっていた客に近寄り、目を開けてもらいます。以下、マジシャンと客との会話です。

マ「あなたが目を瞑っている間、誰かがあなたの身体に触りましたか？」

客「はい」

マ「身体のどこですか？」

客「左肩です」

マ「何回か触ったと思いますが、何回ですか？」

客「3回です」

以上のやりとりで、この光景を観ていた観客は、みな驚きますが、もちろんこれには秘密があります。それは、この目を瞑る客に、マジシャンが目を瞑るように指示したときは、当然マジシャンはその客のそばにいて、客が目を瞑ったあと、あたかも、客の身体の周囲には何もないように、両手を客の身体の周囲に翳して強調してみたりしたときに、ステージ下で観ている観客にわからないように左肩に3回触るのです。それにはテクニックがあって、拡げていた指を観客の目から隠れたときに指だけ曲げて肩に触るなどの方法です。そして、そのあとで、目を開けているほうの客に向かいます。したがって、実際は、目を瞑った客はすでに左肩を触られていて、目を開けている客は、これから触られるのです。ここに時間差(タイム・ラグ)があるのですが、マジシャンと目を瞑った客との会話のやりとりの中では、タイミングについては言及されていませんので、観ている大勢の観客からはリアルタイムで行なわれたように錯覚するのです。

もうひとつ、二人の客の間が近接している場合は、一方の客の姿勢を糺すような素振りや、目を瞑っている客の身体に触れるなどのテクニックを行ないません。この場合も、目を開けているほうの客の身体に触れるよりもかなり前に目を瞑っているほうの客の身体に触れているのですが、質問の仕方が、「あなたが目を瞑っている間に、誰かあなたの身体に触れましたか？」というような時



間の特定のないものですので、この時間差(タイム・ラグ)については、観ている観客には気が付きません。

二人の客の間が離れている場合も、近接している場合もバリエーションはたくさんあって、とてもここには書ききれません。原則は、目の瞑っている客と目の開けている客との間には、触られた時のタイミングに時間差(タイム・ラグ)があるにも関わらず、誰もそのことに言及しないので、観ている観客からは、リアルタイムで、触られていないはずの客が触られたと感じる不思議な現象が起こったと見えることです。

### 3. ギミックを使うもの

私が持っているこのためのギミックは2つあります。

#### (1) Spectro Touch

購入した当時、こういう原稿を書くことになるとは思わなかったので、一度、動作確認のために試してみてから、これは使わないな、と思い、どこかに仕舞いこんだままで、今回、探しましたが、足で操作するスイッチしか見つかりませんでした(写真153)。ギミック本体は、4cm四方くらいの黒い箱で、バッテリーが入っており、ワイヤレスの遠隔スイッチで、小さなハンマーが出し入れできる仕組みになっています。写真153のスイッチはオプションで、このハンマーを足の指先で操作するスイッチです。本体は約200ドル(約25800円)、足のスイッチは約40ドル(約5200円)です。



写真153

この本体は小さくて軽いので、マジシャンがパームして、このギミックを客の背中や、客の座る椅子に貼り付けることができます。ワイヤレスですから、離れたところから操作できるので、二人の客を離して、リアルタイムでハンマーを操作すれば、まさに、同時に身体に触れられたように感じるというわけです。客の背中に付けたりする方法は、客の立っている位置を直したり、姿勢を直したり、いくらでもチャンスがあります。もう一人の客に、見られないように、二人の客の位置関係にも配慮する必要があります。

#### (2) Invisible Touch



同じような名前の商品がいくつか出ていて、これは、机の背後に付けて、客の背中などをタップするギミックです。もちろん、ワイヤレスの遠隔操作です(写真154)



写真154

実際の使い方や演出は省きますが、このギミックを装着した椅子に座った客に目を瞑ってもらい、椅子の背後から、このギミックのハンマー(写真154の針金のようなもの)であたかも背中に触っているように思わせるのです。けっこうBGT(British Got Talent)などでも、類似のギミックを使ったマジシャンが登場していましたから、実用性はあると思います。

#### 4. インビジブル・スレッドを使うもの

日本のテレビで演技をしていたのは、これではないかと思います。インビジブル・スレッドでは肩を叩くようなことはできませんから、目を開けているほうの客の手の甲に、たとえば、鳥の羽で触ったり、紙巻タバコの中身を少しずつ落としたりすると、目を瞑っているほうの客が、その感触を自分の手の甲に感じるなどの現象です。場合によっては、頬に何かが触れたというような演出も可能です。え？紙巻タバコの中身？と一瞬思われた方もいたかもしれません。要するにシガレットのフィルターが付いてない方の端を指でほぐして中の刻んである葉を少しずつ目の開いている客の手の甲に落とすのです。一方、目を瞑っている客の手の甲はインビジブル・スレッドで触ります。これは、さきほどの時間差で、先に、目の瞑っている客の手の甲をインビジブル・スレッドで触り、ただちに、シガレットを目の開いている客の手の甲にほぐして葉を落とすのです。自分でやってみるとわかりますが、シガレットのほぐした葉が落ちて手の甲に触れるのと、インビジブル・スレッドで手の甲に触れるのとは、まったく同じ感触です。

これには、インビジブル・スレッド・リールを使います(写真155:2種類掲載)。インビジブル・スレッドであれば、特にリールでなくてもよいと思いますが、リールの方がスレッドの準備や演技の後の処理が容易です。やり方は、ITRを上着の下のシャツなどの左袖の中に付けておいて、スレッドの先端にマジシャンズ・ワックスを付けておきます。スレッドを長く延ばす場合には、このワックス部分を、どこかに付けなければいけないのですが、それをアンカー(錨)と呼びます。通常は、客の腕時計や肩などにアンカーを付けます。



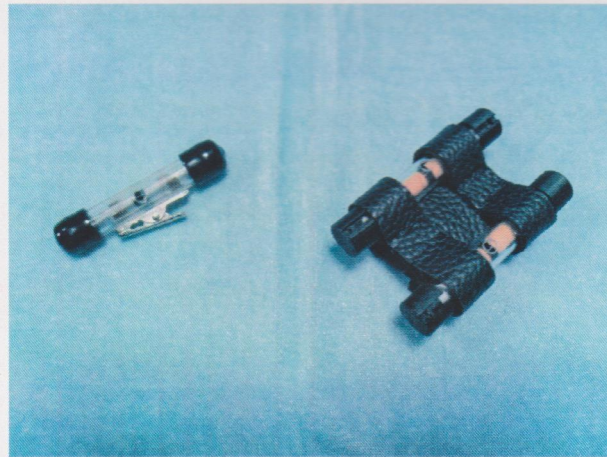


写真155

アンカーを使わない場合は、右手親指にワックスを付けてスレッドを伸ばし、右手指先に一回転するように引っ掛けてから、両手の間にスレッドを緩く張ります(写真156:見えるように黒い糸を使っています)。このスレッド部分で、目を瞑っている客の右手の甲をちょっと触ります。

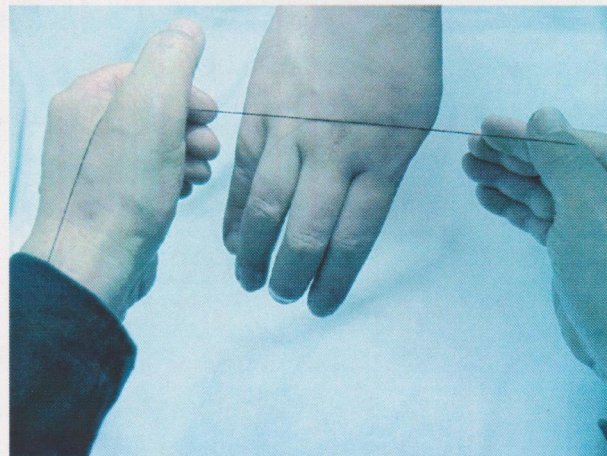


写真156

目を瞑っている客の首筋や頬などに触る場合は、スレッドを長くする必要があります。首筋の場合は、たとえばアンカーを客の右肩に付け、マジシャンは客の背後から左肩のほうに回って、スレッドを高く上げて上下に動かすようにすれば、スレッドは僅かに客の首の背後に触れます。髪の毛の長い女性向きではありませんが、男性やショート・カットの女性なら可能です。

また、アンカーを客の左肩背部に付け、マジシャンがやや前方に位置して、スレッドが客の左頬に触れるようにすれば、客は、自分は左頬を触られた、と答えます。このときも、スレッドが客の頬に触れるのは僅かにします(写真157:見えるように黒い糸を使っています)。いずれの場合も、マジシャンが腕を不自然に高く上げなくてもいいように、マジシャンよりも上背の低い客を選んでスレッドを両手で操作するか、あるいは、目を瞑るほうの客を椅子に座らせるなどの工夫をします。写真157では、位置関係を示すために、トルソー(胴体模型)を使って、アンカーの位置とマジシャンの手の位置を示してあります。これは一例であって、左右や高さはこの限りではありません。





写真157

いずれの場合も、ワックス部分を剥せば、スレッドはリールの力で、自然に袖の中へ回収されますので、どこにも痕跡は残りません。

#### 5. その他

目を開けているほうの客に息を吹きかけたり、匂いを嗅がせたりすると、目を瞑っている客が風や匂いを感じたりします。アメリカでは、手や頬にキスしたりもしますが、日本ではあまり一般的でないので、手の甲や頬に息を吹きかける程度にします。マジシャンから息を吹きかけられるのは、もちろん目を開けているほうの客で、その後、離れて立っている目を瞑っているほうの客に、「何か感じましたか？」と訊くのです。客は、手の甲や頬に風を感じたと答えますから、PK Touch は成功したことになります。これは、前述の時間差とマジシャンが送る風とを組み合わせたものです。風を送るのは、ゴム球に細いチューブを付けたものを用います(写真158)。写真のものは「ふいご」ですが、血圧計用のゴム球や、理科学実験用のゴム球が市場で販売されていますので、それにチューブを繋ぐだけで使えます。チューブを付けるのが面倒な人は、写真のように一体化して売られている「ふいご」でも PK Touch には十分です。



写真158



やり方は、このゴム球を左右どちらかの脇の下に挟み、チューブを上着の袖などを通して、出口を手首側に固定しておきます。目を瞑っている客の手の甲や頬にタイミングよく風を吹きつけておきます。そのときは、何も言わず、離れて立っている(あるいは座っている)目を開けている客のところで、観客に見えるように、マジシャンの息を手の甲もしくは左頬などに吹きかけます。ただちに、目を瞑っている客に向かい、次のように会話をします。

マ「目を瞑っている間に身体に何か感じましたか？」

客「はい。」

マ「そうですか。身体のどの部位ですか？」

客「頬です」

マ「どちらの頬ですか？右頬ですか？左頬ですか？」

客「左です」

マ「何を感じましたか？」

客「風です」

このときも、ステージに上がっている二人の客も見ている大勢の観客も、「風」に時間差(タイムラグ)があることは知りません。

人によっては、チューブを付けずに、ゴム球だけを上着の裏側に取りつけて、それを手で握ることによって、直接ゴム球から風を客の手の甲に吹き付けるやり方をしているマジシャンもいますが、観客が大勢いたり、ステージ上で演じる場合は、ちょっと危険なので採用しませんでした。

一方、匂いのほうはちょっとややこしくて、たとえば、仮に薔薇の匂いであったとしても、目を瞑ったほうの客が、薔薇の匂いと同定できるかどうか保証がありませんので、単に、「いい匂い」と答えることもあります。これはもちろん、予めマジシャンの指に付けた薔薇などの匂いのエッセンスを、目を瞑っている客の鼻の下に指を一瞬持って行くだけで、「いい匂い」が記憶に残りますから、目の開けている客には実際の薔薇の花を手渡して匂いを嗅いでもらう演出です。これも時間差で匂いを感じたこととなります。

## 6. コメント

PK Touch のことはいずれ書かねばならないと思っていました。それで、関連の本や商品を集中して調べてみたのです。そうすると、本や商品などの材料が多い割には、文章で書くことがそれほど多くなくて、テクニックのニュアンスが言葉だけでうまく読んでいる人に伝わるかどうか懐疑的でした。ちなみに、1997年に刊行された松田道弘さんの「メンタル・マジック事典」(東京堂出版)には、PK Touch に関する項目も記述もありません。今回、紙数の関係で解説が十分でなかったところなどは、後日トルソー(胴体模型)を使って詳しく追加解説しておこうと思い、(1)としました。

これは、masquerade part9 の No.5 です。

連絡のメールアドレスは、[masqpart4@aol.com](mailto:masqpart4@aol.com) です。

2022年5月